

パネルディスカッション
非認知能力と子どもの日本語の学習・教育—アイデンティティを捉え直す—

非認知能力の発達について
—動機づけ研究の観点から—

赤松大輔（京都教育大学）

1. 第二言語学習を支える非認知能力と動機づけ

第二言語学習は、学校教育をはじめとした多様な場面において展開される。例えば、外国にルーツのある子どもが日本で生活している場合、彼らは学校の国語科の授業で日本語を学ぶだけでなく、授業内外での友人や教師とのやりとりにおいて日本語に触れる機会があり、多様な文脈で日本語の学習がなされているだろう。このように多様な場面で展開される第二言語学習においては、子どもがもつ知識や学力以外の資質や能力、すなわち非認知能力が求められることが往々にしてある。

非認知能力に関する明確な定義はないが、近年の教育政策や研究知見においては、非認知能力は社会情動的スキルや社会情緒的コンピテンスと称されることも多い。その定義に基づくと、「a) 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、b) フォーマルまたはインフォーマルな学習体験によって発達させることができ、c) 個人の一生を通じて社会経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」が非認知能力の定義と捉えられる（小塩、2023）。経済協力開発機構（OECD）によると、社会情動的スキルはさらに、目標の達成、他者との協働、情動の制御から構成されるとされている。

本稿では、学習者の動機づけに特に焦点を当てていく。効果的で持続的な第二言語学習の達成のために、学習者の動機づけは欠かせない。動機づけとは、特定の行動を推進・維持する過程と一般的に理解され、社会情動的スキルの要素のうち目標の達成に深くかかわる心理的概念であると解釈できる。

動機づけは大きく、個人の興味や関心から生じる内発的動機づけと、周囲による報酬や罰などから生じる外発的動機づけに分類される。内発的動機づけの効用に関する研究として、Murayama et al. (2013) は、ドイツの生徒の6年間にわたる学業達成の変化を縦断的に測定し、それに知能（本稿の想定する認知能力に相当）と内発的動機づけ（本稿の想定する非認知能力に相当）がどのような影響を与えるか検討した。その結果、生徒の知能は調査開始時点での学業達成の高さに影響していたのに対して、内発的動機づけの高さは調査期間の6年間にわたる学業達成の伸び幅に影響していた。ここから、内発的動機づけには、学業達成に対して生徒個人の知能とは異なる効用があることが示唆された。個人の知能に対して教師が介入することは困難であるため、生徒の動機づけに注目しその向上を図ることが重要であることがこの知見からも考えることができる。

2. 動機づけについて理解する枠組みとしての自己決定理論

動機づけについて理解し、その支援について考案するための有力な枠組みとして、自己決定理論が挙げられるだろう。自己決定理論は、個人の自己決定性に着目し、自己決定性の高い動機づけが高いパフォーマンスや精神的健康につながるとする理論である（Deci & Ryan, 1985; レビューとして、西村、2019）。本稿では、自己決定理論における主要な想定である（A）動機づけの連続性と（B）動機づけの内在化に焦点を当て、子どもの動機づけ支援に関する提案を行っていく。

2.1. 動機づけの連続性

第一に、自己決定理論においては、従来の「外発か内発か」という二分法的な分類から脱却し、自己決定性という一軸のもとに以下のような動機づけの分類が試みられている。1つ目は外的調整であり、報酬の獲得や罰の回避、社会的規則などの外的要求に基づく動機づけをさす。2つ目は取り入れ的調整であり、自我拡張や他者比較による自己価値の維持、罪や恥の感覚の回避などに基づく動機づけをさす。3つ目は同一化的調整であり、活動の価値を自分のものとして受け入れている状態をさす。4つ目は内的調整であり、興味や楽しさに基づく動機づけをさす。これらの動機づけは、自己決定性の高い順に、内的調整、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整と連続的な構造をなしていて、概念的に隣接する動機づけ間の関連が強く、概念的に離れた動機づけ間の関連は弱いという関係にあるとされている。

動機づけの連続性を想定した実証的研究では、個々の動機づけの機能や発達の変化について検討されている。動機づけの機能については、自己決定性の高い動機づけほど学業達成や精神的健康との関連が強いことが示されている（西村他、2011; Taylor et al., 2014）。また、動機づけの発達的变化につ

いて、本邦の小学生と中学生を対象とした西村・櫻井（2013）は、自己決定性の高い動機づけが学年に伴い低下し、自己決定性の低い動機づけが学年に伴い上昇し、とりわけこの変化が小学校から中学校への移行において顕著であることを示している。

2.2. 動機づけの内在化

第二に、自己決定理論では、上記の動機づけの質的な変化が想定されている。特に、自己決定性の高い動機づけへの移行のことは内在化と呼ばれ、自律性や関係性、有能感という3つの欲求が満たされることで生じることが想定されている。自律性とは、人間が生得的にもっている「自己決定したい」という欲求のことをさし、より簡潔にはいかに自由にふるまえているかを表す。関係性とは、人とのつながりやコミュニケーションに関する肯定的な感覚への欲求のことをさし、より簡潔には対人関係の良好さを表す。有能感とは、社会文脈の中で自らの能力の程度を肯定的に認めたいという欲求のことをさし、より簡潔には自分自身に自信をもてる程度を表す。

さらに、これら3つの欲求を満たす周囲の働きかけとして、自律性支援、関係性支援、有能感の支援があるとされている。自律性支援とは、相手の立場に立ち、相手に選択肢や機会を与え、要求をする際に論理的根拠を提供する行動である。関係性支援とは、相手に対して理解や好意を示し、関わろうとするといった行動である。有能感の支援とは、相手に対して一貫した肯定的な期待を抱き、ポジティブなフィードバックを提供する行動である。

2.3. 自己決定理論に基づく動機づけの理解と支援

これら自己決定理論における想定に基づくことで、子どもの動機づけの状態を理解したり、より自己決定性の高い動機づけへの移行をめざした支援を考案したりすることが可能になる。例えば、テストで悪い成績をとりたくないと思死に取り組んでいる子どもは一見して動機づけが高いように映るが、それが外的な罰や不安によって生じているものなら、動機づけの連続性の中では外的調整や取り入れの調整といった自己決定性の低い動機づけ状態にあると解釈でき、その取り組みは長期的には続きにくいと考えられる。また、動機づけの内在化の観点にたつと、こうした子どもの背景には、学校生活において自由にふるまえなかったり（自律性欲求が満たされない）、友人や教員との関係が良好でなかったり（関係性欲求が満たされない）、学習面の自信が得られなかったりする（有能感の欲求が満たされない）といった要因があると考えられるかもしれない。そして、これらの欲求を満たす工夫として、子どもに課題の選択肢を与えたりその価値を伝えたり（自律性支援）、子どもへの関心を示したり（関係性支援）、子どもを積極的にほめたり成長が可視化できる工夫をしたり（有能感の支援）することが、子どもがより自己決定性の高い動機づけ状態で学習に向かえる支援となる可能性がある。

このように、本稿では心理学における動機づけ概念を中心に据え、子どもの発達に伴う学力向上に対する動機づけの効果（Murayama et al., 2013）、多様な動機づけの発達的变化（西村・櫻井、2013）、動機づけそのものの質的变化（動機づけの内在化）という点から「非認知能力の発達」を捉えた。パネルディスカッションでは、とりわけ日本語学習の文脈において動機づけがどのような役割を果たすのか、ボニー・ノートンによる主張との接点も合わせ議論していきたい。

【引用文献】

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985) 『Intrinsic motivation and self-determination in human behavior』 Springer New York
- 鹿毛雅治 (2013) 『学習意欲の理論』 金子書房
- Murayama, K., Pekrun, R., Lichtenfeld, S., & Vom Hofe, R. (2013) 「Predicting long - term growth in students' mathematics achievement: The unique contributions of motivation and cognitive strategies」 『Child Development』 Society for Research in Child Development, 84, pp.1475-1490.
- 西村多久磨 (2019) 「自己決定理論」 上淵寿・大芦治編著『新・動機づけ研究の最前線』 北大路書房、pp.45-73
- 西村多久磨・櫻井茂男 (2013) 「中学生における自律的学習動機づけと学業適応との関連」 『心理学研究』 日本心理学会、84、pp.365-375
- 小塩真司 (2023) 「『非認知能力』の諸問題—測定・予測・介入の観点から—」 『教育心理学年報』 日本教育心理学会、62、pp.165-183
- Taylor, G., Jungert, T., Mageau, G. A., Schattke, K., Dedic, H., Rosenfield, S., & Koestner, R. (2014) 「A self-determination theory approach to predicting school achievement over time: The unique role of intrinsic motivation」 『Contemporary Educational Psychology』 Academic Press Inc., 39, pp.342-358